

「フォースタス博士の悲劇」 (クリストファー・マローウ)

ドイツはウィッテンベルヒのフォースタス博士はありとある學問の蘊奥を究めた揚句、「學問の輝ける賜物に食傷し」今や「惡魔の業」たる魔術に惑溺するに至る。「利益と悅樂が、いや權力が、名譽が、全能が」約束される魔術に精進して「神に近い」存在にならう、「さうだ、神になるために」魔法の書を懸命に學ぼうと決心する。とは云へ、彼とてもかかる不遜な思ひを戒める「善天使」とそれを唆す「惡天使」との葛藤に胸中苦しみはするが、結局は惡の誘惑に負け、大魔王ルシファアの配下メフィストフィリスを呼出してかう告げる。今後二十有餘年、お前が常に俺に仕へ、俺の欲しがるものは何でもくれ、思ふ様官能の欲に浸らせてくれるならば、その「奉仕の代償として魂を賣り渡す」用意があるとルシファアに傳へてくれ。

かくしてファウストは二十四年の契約期限を定め、期限切れの暁には「靈肉、身體、血、及び財産」を剝奪され地獄に墮されても否やはないと記した證書をルシファアと取交はず。だが、

その後も彼は「天上の喜び」を失つた事を悔い、墮地獄の恐怖に戦き、改心も試みるが、とど
の詰り、「地獄にはありとあらゆる楽しみがある」とのルシファアの誘惑の言葉に屈して悪魔
に魂を賣り渡して了ふ。

以後二十四年間、彼は世界中を飛び回つて天文の諸々の祕密を探り、快樂と放蕩に耽り、至
る處で豊かな學識を披露し、魔術を用ひて人々を驚かし、ローマ教皇にすら惡戯を仕掛ける。
彼の名聲は全世界に及び、ドイツ皇帝を始め多くの讚仰者を獲得するが、やがて契約期限の時
が迫ると絶望と不安が彼を襲ふ。「フォースタス、用意はよいか、もうすぐ期限がきれるのだぞ」
と、「地獄が誓約の履行を迫」り「うなり聲をあげて叫」ぶのだ。

フォースタスは「氣違ひのやうに絶望にさいなまれ」、「荒れ狂ふ頭は妄想を次々とたくらみ」、
官能の喜びの裡に恐怖を忘れようとするが、メフィストフィリスは「すべては無駄」だと冷た
く宣告して泣き喚くフォースタスに云ふ、「もう遅すぎる。(中略)地上で笑ひ興ずる馬鹿ども
は地獄で泣く仕組みになつてゐるのだ」。最後の晩、フォースタスの書齋から「凄惨な叫び聲」
がして、翌朝、書齋の床には彼の「四肢が死の手にかかつてはずたずたに引き裂かれて」ゐた。

ファウスト傳説を題材とした最初の傑作であり、後にゲーテも敬意を表したマールロウの代表

作であるが、「マルタ島のユダヤ人」同様異常な欲望に驅られる人物を主人公とはするものの、作品の色調は随分違ふ。R・シウォールの云ふ様に、フォースタスは「信仰するが故に存在する」とする中世的人間觀と、「思考し行動し發見するが故に存在する」とするルネッサンス的人間觀との「ディレンマ」の裡に生きてゐる。或時メフィストフィリスがフォースタスに云ふ、「天國ならざる一切の場所こそすなはち地獄なのだ」。フォースタスが「地獄などいふものはお伽話にすぎ」まいと云ふと、彼は答へる、「さう考へておくがよい。自分で體驗したら意見も變らう」。詰りマールロウにとつて地獄は「お伽話」どころではなかつた。「天國ならざる」現世も地獄以外のものではなく、そこは「傲慢・貪欲・嫉妬・憤怒・大食・怠惰・好色」といふ「七大罪惡」に塗れた人間どもの「永劫の住ひ」に他ならない。けれども同時に、被造物でありながら全知全能の「神になりたい」と冀ふフォースタスもマールロウの中には強烈に生きてゐた。かかる「對立物の共在」故のダイナミックな二元論こそが西洋を非西洋と峻別する、即ち西洋を西洋たらしめる根源的な精神傳統に他ならない。（平井正穂譯、「エリザベス朝演劇集」、筑摩書房）